

## フィルムを周年展張したハウスにおける イチゴ早期作型の遮光技術

イチゴ栽培は通常 10 月にハウスのフィルム被覆を行うため、9 月の定植前に降雨があると定植が遅れて収量が低下しやすい。そのため、フィルムを周年で展張したハウス（以下「周年展張ハウス」という。）で栽培する農家が増え始めています。しかし、周年展張ハウスでの早期作型栽培では、生育初期の高温による第一次腋花房の花芽分化の遅れが問題となります。高温回避には遮光処理が有効ですが、長期間の遮光は頂花房の生育抑制につながります。そこで、福岡県農林業総合試験場では、イチゴの早期作型において頂花房の生育が抑制されず、第一次腋花房の開花が早まり 1～2 月の収量が増える遮光技術を開発しましたので、その概要を紹介します。

### ☆ 技術の概要

1. 周年展張ハウスの早期作型で露地比 80%の遮光を行うと、無遮光に比べて 9～10 月の株元気温が低くなり、第一次腋花房の年内開花株率が高まります（図 1）。
2. 露地比 80%遮光を 9 月 25 日から 20 日間行くと、頂花房の開花日は無遮光と同等になり遮光の悪影響は見られません。また、第一次腋花房の開花日は無遮光より早まります。
3. 露地比 80%遮光の 1～2 月商品果収量と粗収益は無遮光に比べて多く、遮光にかかる資材費（3 万円/10a・年）を引いた所得は、10a 当たり約 29 万円の増加が見込まれます（図 2）。

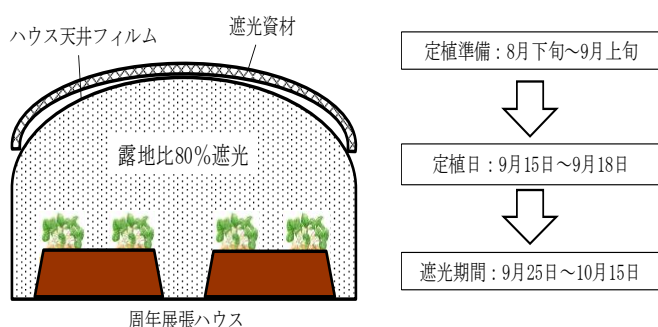


図1 イチゴ早期作型における遮光方法と8～10月の作業の流れ

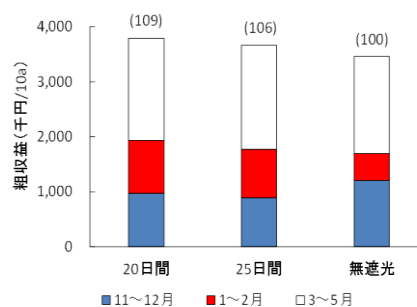


図2 遮光期間と時期別の粗収益

注) 1. 粗収益は商品果収量と「あまおう」の月別平均単価とから算出し、○内は無遮光を100%とした比率。

### ☆ 活用面での留意点

1. 遮光資材はハウス上面のフィルム上に張り、通気のためにハウス側面を約 1m 開放します。
2. ハウス骨材・被覆フィルム条件（長期間経過すると光透過率が低下）等によってハウス内の光環境は異なるため、イチゴ株が露地比 80%の遮光状態になるように留意します。
3. 遮光を 20 日間以上行くと茎葉が徒長しやすいので被覆期間は延長しないようにします。また、遮光期間中は土が乾きにくいので灌水量に注意します。
4. 詳しいことは、福岡県農林業総合試験場野菜部イチゴチーム（TEL:092-922-4364）へお問い合わせ下さい。

（日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏）